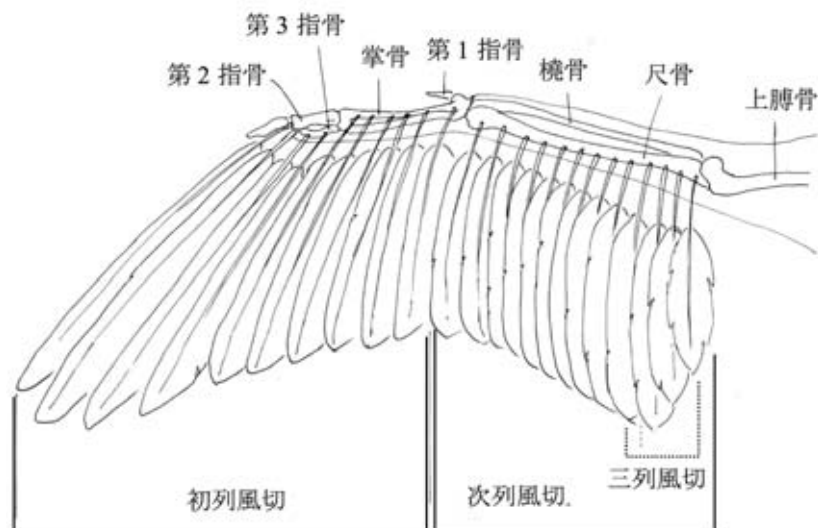


無い。鉄塔の下も非常にきれいで、春の喧騒は嘘のようである。

夏が終わるころハヤブサは再びこの鉄塔で本格的に食事を取り始める。そして、カラスやトビがハヤブサの狩の獲物を求めてやってくるようになる。時を同じくしてムクドリも鉄塔に戻り、辺りも急に賑やかさを取り戻す。このムクドリも鉄塔でのハヤブサの動きを知っているのか、とまっているハヤブサのかなり近くまで行く。しかし、鉄塔から飛び立つときは、いつもなら大きく旋回して戻ってくるムクドリだが、ハヤブサが鉄塔に来ていると、まるで“ダルマさんが転んだ”をしているように急いで戻ってくる。鉄塔の下も見る見るムクドリの糞やペリットで汚れていき、このペリットに混ざった種子を目当てにキジバトが鉄塔の下にやってくるようになる。そして、この丸々太ったキジバトはハヤブサの餌となるのである。

さまざまな羽

鳥の体を覆っている羽はさまざまな役割を持っている。大きさや形、色の違いがあり、雄と雌、成鳥と幼鳥、季節によっても違いがある。まず、羽には正羽と綿羽があり、正羽は、飛翔羽と体羽に分けられる。飛翔羽とは、風切羽や尾羽など飛ぶために必要な羽のことで、翼を形成する風切羽には初列風切羽、次列風切羽、三列風切羽がある。初列風切羽は翼の一番外側の特に長くて細い羽で、動物の手のひらの部分の骨（掌骨と第2指の指骨）についている。初列風切羽の次に次列風切羽、三列風切羽と続き、腕の部分にあたる骨（尺骨）についている。三列風切羽は一番内側にある階段状になった羽である。尾羽とは文字どおり尾の部分に生えている羽のことで、方向転換やブレーキ、全体のバランスを取ったりする役目もしている。

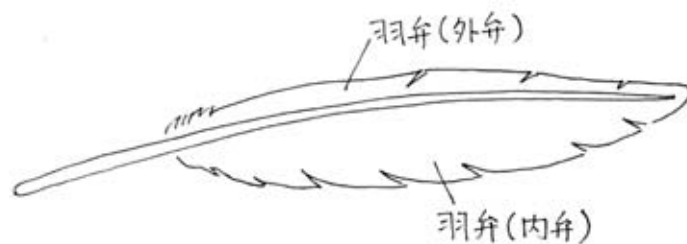


ハヤブサの食事内容の探索には落ちて来た羽が大きな手がかりとなる。今回は今まで回収してきた飛翔羽をもとに、少しずつ分かってきた羽の落とし主の特定方法を述べていこうと思う。

語りかける羽（飛翔羽）

飛翔羽は慣れてくると初列風切羽、次列風切羽、尾羽とある程度見分けることができるようになる。そして、カイツブリのように極端に小さな翼のものもあるが、風切羽の大きさで、羽の持ち主の鳥の大きさのある程度予想することが出来る。

羽の形や色、模様も重要な手がかりとなる。たとえば、タカ目の羽には鷹斑と呼ばれる独特の模様があるが、ホトトギス目（カッコウの仲間）の羽にも良く似た模様がついている。このタカ目とホトトギス目を区別する手がかりとなるのが初列風切羽の形である。ホトトギス目の初列風切羽の外弁はなめらかな形をしているのに対しタカ目の初列風切羽には



段刻と呼ばれる段差が入っていることが多い。似たような模様を持つフクロウ目の初列風切羽はやや丸みを帯びた形をしているという特徴をもつが、大きな違いは手触りにある。羽音を消すために羽の表面に細かい毛が一面に生えているため、まるでビロードに触れているような柔らかな感触である。飛ぶ時に音を消すフクロウ類の羽の特徴は新幹線のパンタグラフにも応用されている。



ホトトギス目
ジュウイチ

タカ目
ツミ

フクロウ目
オオコノハズク



ハヤブサの風切羽と尾羽

次列風切羽で特徴があるのはなんといってもカモ類の羽であろう。翼鏡と呼ばれる部分の羽で金属のような光沢があり非常に美しい。また、カモ類の尾羽は羽の先がとがった独特な形をしており、これも羽の落とし主を探す手がかりとなる。

このように一枚の羽が、本当に色々なことを語りかけてくれるのである。



美しい落とし物

今回も長谷川太一先生に助けを頂きながら翼の標本を仕上げる事が出来た。ツグミの翼と尾羽の標本であるが、羽の名前や役割を理解する上で大いに役立った。

